報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

2019年　4月　11日

関西学院大学 学長殿

所属：文学研究科
職名：博士研究員
氏名：小林正法

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	□特別研究期間　□自由研究期間 □大学共同研究　□個人特別研究費 ■博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦
研究実施場所	応用心理科学研究センター（全学共用棟3F）
研究期間	2018年　4月　1日　～　2018年　12月　31日（　8ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2018年度では，研究課題に関する研究として援助行動意図と予期感情の関連を調べる研究を実施した。エピソードシミュレーション（episode simulation）と呼ばれる，未来に起こりうる出来事を詳細に想像するという心的機能が知られているが（e.g., Schacter et al., 2007），Gaesser et al.(2014)は，援助行動を行うというエピソードシミュレーション（想像）が援助行動意図を高めることを明らかにしている。具体的には，援助が必要な状況にある人物を描写した文章を提示し，その人物を援助する行動を取る想像を行う援助想像群，その文章の情報源（例．新聞記事など）を考える統制群を比較している。その結果，統制群と比較して，援助行動のエピソードシミュレーションを行った群の方が描写されている文章の人物を援助するという意図が高くなった。さらに，想像の鮮明さの高さは，援助意図と正の相関が見られてきた。このように援助行動を取るという想像が援助行動意図を高めることがこれまで明らかにされていた。また，将来起こりうる行動だけでなく，将来経験すると考えられる感情をヒトは予期することができるが，このような感情は予期感情と呼ばれる。予期感情にはネガティブな予期感情として後悔（regret）や罪悪感（guilt),ポジティブな予期感情としてプライド(pride)やwarm glowが知られている(e.g., der Schalk et al., 2015; var der Lindenn, 2018）。予期感情は行動意図を介して，行動の生起にも関わる（Perugini &

Bagozzi, 2001）。例えば，ある行動を行わなかった場合のネガティブな予期感情は，その行わなかった行動意図を高める（e.g., Zeelenberg, 1999）。同様に，ある行動を行った場合のポジティブな予期感情はその行動意図を高める（ver der Lindenn, 2018）。このように想像や予期感情は行動の意図を高めることが知られているが,両者の関連は詳細に検討されていない。そこで，本研究では想像時におけるポジティブな予期感情，ネガティブな予期感情のそれぞれが援助行動意図を高めるかどうかを検討した。援助行動についてのモデルである否定的状態解消モデル（Cialdini et al.,1987）によれば，援助行動はネガティブな状態の解消またはポジティブな状態の生起を目的として生じるとされる。否定的状態解消モデルに従えば，（援助行動を行う想像時の）予期warm glowと（援助行動を行わない想像時の）予期罪悪感のそれぞれが援助行動意図を高めると予測される。

予期感情と想像による援助行動意図の促進を検討するにあたり，まず，実験1として，Gaessaer et al.（2014; 2018)の結果を日本語刺激によるオンライン実験で再現できるかを検討した。実験1では，まず，援助が必要な状況の人物を描写した文章（例. 貧血になり，座りこんでいる人がいます）を提示した。援助想像群には，文書の提示に対して，よく知っている大きな駅またはデパートで,文章の人物を助ける行動を取ったという想像をするよう求めた。また，非援助想像群には，文書の提示に対して，よく知っている大きな駅またはデパートで，文章の人物を助ける行動を取れなかったという想像をするよう求めた。統制群には，文章の提示に対して，その文章の情報源や文章の修正点を考えるよう求めた。その後，描写されている人物への援助行動意図や想像の鮮明さを測定した。その結果，統制群，非援助想像群と比較して，想像群の援助行動意図が高まることが示された。また，統制群と非援助想像群の間で援助行動意図に差はなかった。さらに，援助想像群において，想像の鮮明さは援助行動意図と正に相関していた。この結果は，日本語刺激を用いたオンライン実験によって先行研究結果（Gaesser et al., 2014; 2018)を再現できたことを示している。

実験1の結果を踏まえて，実験2では援助行動を行う想像する群ではその際の予期warm glowを測定し，援助行動を行わない想像をする群ではその際の予期罪悪感を測定し，ネガティブ/ポジティブな予期感情が援助行動意図と関連するかどうかを調べた。先に述べたように，（援助を行う想像時の）予期warm glowと（援助を行わない想像時の）予期罪悪感ともに援助行動意図と正に関連すると予測した。実験2の結果，予期warm glow及び予期罪悪感の高さは援助行動意図を正に相関していた。このように，予期感情は援助行動意図と関連することが明らかになった。しかしながら，元々の援助行動意図が高い個人であるほど，想像時の予期感情の強度が強い可能性があった。すなわち，（元々の）援助行動意図が高い個人は，自身の意図と反した行動である援助を行わないという想像時に予期罪悪感をより感じ,一方で，自身の意図に沿った行動である援助を行うという想像時に予期warm glowをより感じた可能性があった。

そこで，実験3として，想像前に個人ごとの（全般的な）援助行動意図を測定し，その影響を統制した上でネガティブ/ポジティブな予期感情と援助行動意図の関連を調べた。実験3の結果，実験2と同様に予期warm glowと予期罪悪感ともに援助行動意図と正の相関が見られた。

一連の実験によって,援助行動を行う想像が援助行動意図を高めるということが明らかになった。この結果は，想像による援助行動意図の促進を示した先行研究（Gaesser et al., 2014; 2018）と一致するものであった。さらに，ネガティブな予期感情である予期罪悪感，ポジティブな予期感情である予期warm glowともに想像による援助行動意図の促進の程度と正に関連していた。これは，予期感情が援助行動意図を高めるという役割を持つことを示唆しており，否定的状態解消モデル及びに予測と一致するものである。本研究によって，予期感情は意思決定において重要な手がかりとして機能しており，援助行動の生起においては，「いま」の感情状態のみに着目するのではなく，「これから」の感情である予期感情を考慮することが重要であることが示唆された。

本研究結果を踏まえて，今後は，実験的に罪悪感やwarm glowを喚起することで，これらの感情が援助行動意図を高めるかどうかを詳細に検討するだけでなく,援助行動意図を超えて，実際の援助行動の生起を促進するかどうかを調べる必要がある。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。